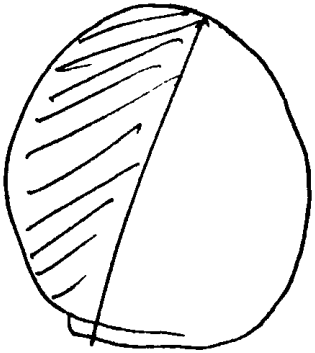
ニュースの愉しみ

伊藤光彦

ニュースの愉しみ

伊藤光彦

毎日新聞社



著者略歴
伊藤光彦（いとう・てるひこ）
1937年長野県生まれ。
京都大学文学部卒。
毎日新聞外信部長，欧州総局長などを経て，現在，福井県立大学経済学部教授。著書に『ドイツとの対話』（毎日新聞社，第30回日本エッセイストクラブ賞受賞），『現代ドイツを新聞で読む』（白水社）など。

ニュースの愉しみ（たの）

一九九三年一一月二〇日 印刷
一九九三年一二月五日 発行

著者 伊藤光彦
編集人 吉田俊平
発行人 田中正延
発行所 毎日新聞社
東京都千代田区一ッ橋／大阪市北区梅田／北九州市小倉北区紺屋町／名古屋市中村区名駅
印刷 中央精版
製本 大口製本
検印省略

万一、落丁・乱丁の本は小社でおとりかえいたします。

©Teruhiko Itō Printed in Japan 1993

ISBN4-620-30962-1

目次

I

ウラジオストク　11

ヨーロッパ統合余聞　14

撤湾跡夢　17

ユーゴ亡国始末　20

キングフィッシュ　23

白梅妄語　26

「生前の写真」　29

日本ヤクザ考　32

地域大国トルコ　35
英国のシャックリ　38
エビの向こうのアジア　41
時短とハイテク　44
北東アジアの地中海　47
春の出会い　50
マネー・マシーン散る　53
エキュはめぐる　56
私のバルセロナ　59
人間の檻　62
碁・将棋の位置　65
軍人のしくじり　68
白いおもかげ　71

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

デンマーク・ショック　74
II
ベルリンの街角で　79
シーボルトの町で　82
ハルツ山地のゲーテ　85
ネイビーの栄光と恥辱　88
北海道で迷想する　91
夏が来れば……　94
平成経済学校　97
平成国語教育　100
横山やすしと丸谷才一　103
人間の闇と光　106
イギリスの真実　109

ロシア提督の遺志　112
ソマリアの悲劇について　115
ＡＰＥＣがおもしろい　118
金丸事件の懐手式推理法　121
神聖派閥喜劇　124
ロシアへ、愛をこめて　127
ロシア資本主義の冬　130
「水晶の夜」第二幕？　133
窮鳥、懐に入れず　136
清潔な帝国　139
中国の季節外れ軍拡　142
コメの半世紀　145
平成不況私説　148

III

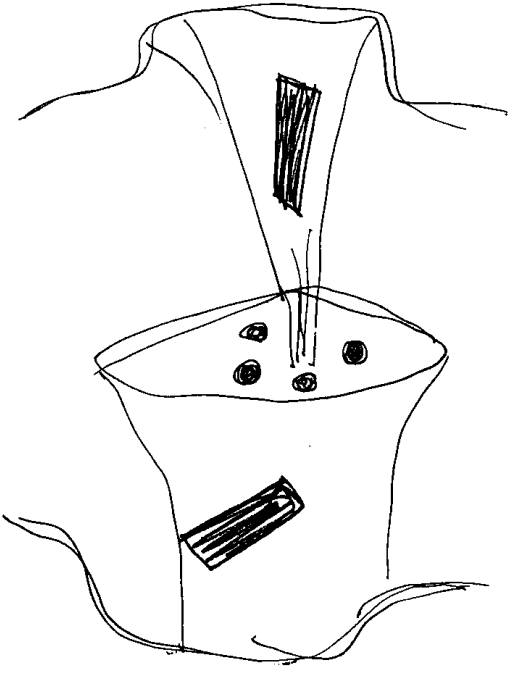
新年に偏差値を考える 153
やや悲観的な話 156
冬柿の里で 159
我慢のしどころ 162
将棋の季節 165
時代を語ろう 168
ニュースの愉しみ 171
台湾「第三の道」 174
産めよ殖やせよ 177
日本電柱序説 180
ゴールド・サークル 183
ソフトな政治、その功と罪 186

種は遍満する　189
ローマの落日　192
憲法は悪文か？　195
「円高」の裏の噴飯劇　198
ある政治家の挫折　201
ヨーロッパとボスニア　204
カネない話　207
冥界の豊穣神――異説プルトニウム　210
日米のシャツ　213
欧州の出しゃばり　216
あとがき　219

ニュースの愉しみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

I



ウラジオストク

ソ連の行く末が心配でたまらない、と浮かぬ顔をしている日本人が多い。あんなにバラバラになってしまって、二億八千万もの国民が食べて行けるだろうか、ゴルバチョフさんがおいたわしい、というわけである。

財界トップH氏の「読書日記」を読んだら、「ソ連ものを読むとストレスがたまる。だから、そのあと藤沢周平をひもとく」と書いていた。藤沢周平はいつ読んでもストレス消しの薬効あらたかだ。しかし、ソ連邦崩壊物語だって、もともと、日本人は寝るのを忘れ快読して不思議でない。

言語学者の鈴木孝夫さんにお会いしたとき、鈴木さんは「日本がソ連援助をするのはいいですよ。けれどその前に、ウラジオストクの地名くらいは変えてもらわねばならん」とおっしゃった。

「それ、どんなことでしょうか?」と私。以下は先生の講義である。

「ウラジオストクのウラジーってのは、領有する、征服する、という動詞の命令形なんだな。オス

91年6月　エリツィン氏ロシア大統領就任▽8月　ソ連で保守派クーデター、ソ連共産党解散▽12月　ソ連邦消滅・独立国家共同体（CIS）に解組、ゴルバチョフ氏ソ連邦大統領辞任▽92年1月　ウラジオストク、軍事機密都市から開放

トクは英語の east やドイツ語の Ost と同語源で、東の意味。するとウラジオストクは、東を征服せよ、ということになるじゃないか。ウラジオストクの東には、もちろん日本もあるわけさ」

浦塩などとひなびた漢字を充(あ)てていたが、テキはそんな気でいたのか。あわてて百科事典を開いてみると、ウラジオストクは「一八六〇年（ロシアの）軍事哨所が設けられたことに始まり、同七二年港の建設が開始され……」とある。

一八六〇年と言えば、ロシアがシベリアのほぼ全土を手中に収めた後だ（米国にアラスカを売り払ったのは一八六七年）。ウラジオストクの東にあって征服すべき地とは、当時としては日本しかないようである。翌六一年には、ロシア艦が対馬に攻めてきた。

鈴木先生の話は続く。

「ロシアは、西方にはウラジカフカズ（カフカズ＝コーカサス、つまりコーカサスを征服せよ）という都市をつくったが、これは革命後オルジョニキーゼと改名されている。カフカズの人民から抗議を受けたのか、もう征服してしまったからご用済みになったのかは知らんけれどね」

日本の近代史で、北方の巨大国ロシア・ソ連の存在は、頭にのっかったうっとうしい重石であり続けた。これは、ロシア人は本来は善人ぞろいだとか、トルストイやチャイコフスキーを生んだとか、そういうこととは関係ない、日本とロシア間の運命的な問題だった。明治の富国強兵策によって日本が「帝国主義」になるずっと前から、日本人はほとんど本能的に、ロシアに対して構える心

を持っていた。

大槻文彦（『大言海』の著者）は、明治二年に二十二歳の若さで、ロシアについて、

「隙ヲ伺ヒ機ニ乗ジ、苟モ少虚アレバ則チ尺寸ヲ掠メ、以テ南出ヲ図ル」

と、その国家性格をズバリ書いている。詳しいロシア情報があったわけではあるまいが、これは維新期のインテリの洞察力である。

その後のロシアはもっとおっかないソ連帝国となり、七十年余、世界中をビクビクさせた。いま、元の木阿弥の民族国家群に分裂して、ゴタゴタばかり目立つが、それだけ、普通の国になった証拠だろう。「隙ヲ伺ヒ機ニ乗ジ」てウラジオストクの志を思い起こす余裕はなさそうに見える。日本は枕を高くして寝られる。世紀の朗報ではないか。

二年前（一九九〇年）の正月、まだ浪人の身であったエリツィン氏が来日したとき、インタビューの機会を得た。私が「ゴルバチョフ大統領とあまり衝突しないで下さい。彼に去られると世界が困りますから」と言ったら、エリツィン氏は顔を赤くして怒った。

「そんな失礼なことを言われるのは心外だ。ロシアにはゴルバチョフ程度の人間はいくらでもいる」

その点でも、日本人はソ連の行く末について心配無用のようである。

（92・1・5／12）

ヨーロッパ統合余聞

58年1月　EC結成のローマ条約発効▽79年3月　欧州通貨制度（EMS）発足▽91年12月　マーストリヒト条約調印、今世紀中に共通通貨実現と政治統合による欧州連合設立へ

ドイツに取材旅行で行ったついでに、ロンドンへ足をのばした。昨年秋口のことだ。

あまり大事でない色んな用事があったが、古本を買うのが「ついで」の一つだった。三年ほど前、チャリングクロスの古本屋街漁りをしていてみつけた、あるドイツの政治学者の英訳著作集一そろいである。当時で約二十万円相当の値札がついていた。

著者は戦後、ナチスの御用学者の烙印を押され、そのうち忘れられた。しかし、この人物が日本研究の隠れた大家で、太平洋戦争の始まる前、日本の軍閥の一部に強い影響力を持っていたことを知り、興味をそそられた。

英訳本がまとまっているのはみつけ物だったが、なにせ手もと不如意である。書架の最上段で埃をかぶっているその数冊は、私以外の買い手に出会うことはけっしてあるまいと予感させた。それで、要するに買いそびれた。三年たって二十万円の小遣いをつくった私は、ロンドンに着くなり、ホルボーンの宿からチャリングクロスへ直行した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com